

「戦う」という行為

—アインシュタインとフロイトの往復書簡から—



理事・拓殖大学政経学部教授 丹羽文生

2022年2月に始まったロシアによるウクライナへの軍事侵攻は間もなく4年経つが、未だ収束の兆しが見えない。日本の近くでも中国による台湾への軍事的威嚇は強まる一方である。それだけではない。余りニュースにはならないが、今、世界中では大なり小なり多くの紛争・内戦が繰り広げられている。

それにしても、なぜ人間は戦争をするのだろうか。戦争を惹き起こさないためにも、私たち一人ひとりが考えるべきテーマであろう。「相対性理論」を唱えたことで知られるアインシュタインは1932年7月、「精神分析学の祖」とされるフロイトに、こんな書簡を送った。

「なぜ少数の人たちが夥しい数の国民を動かし、自分たちの欲望の道具にすることができるのか？戦争が起きれば一般の国民は苦しむだけなのに、なぜ少数の人間の欲望に手を貸すような真似をするのか？」

当時、ドイツではヒトラー率いるナチス党が台頭し始め、「戦争の足音」が迫りつつあった。続けてアインシュタインは、「答えは1つしか考えられません。人間には本能的な欲求が潜んでいる。憎悪に駆られ、相手を絶滅させようとする欲求が！（中略）これこそ、戦争にまつわる複雑な問題の根底に潜む問題です」と綴った。

人間には「戦う」という欲求が潜んでいる。それが正しいかどうかをフロ

イトに確認しているわけである。フロイトはアインシュタインの問いに対して返書を認め、「貴方の意見に全面的に賛成」と述べた上で、「人間から攻撃的な性質を取り除くなど、できそうもない！」と主張した。

フロイトは精神科医の立場から明確にアインシュタインの見方が正しいと断言しているのである。以上は、浅見昇吾の訳書『ヒトはなぜ戦争をするのか？：アインシュタインとフロイトの往復書簡』（花風社、2000年）からの引用である。

「攻撃性」という本能が人間の中に自然にあるとすれば、これを取り除くことは不可能である。そうなる、いかにして、この本能を人間自らがコントロールしていくかが重要なポイントとなる。

この世に自動車が存在する限り交通事故は起こる。交通事故をなくすために文明社会から自動車を完全に排除することはできない。しかし、ドライバーに対して厳しいルールを設け、信号機やガードレール、或いは道路標識によって交通システムを整えることで、完全ではないかも知れないが交通事故を減らすことはできる。「戦う」という行為も同じようなものなのではないか。

筆者は決して戦争を肯定しているわけではない。「戦争は起こるもの」という現実を見据えた上で、平和を追求していくことが必要であろう。